

# 水村美苗『母の遺産 新聞小説』論

——遺産・ボヴァリズム・翻訳——

山 田 紗 也 子

## はじめに

水村美苗『母の遺産 新聞小説』は、二〇一〇年一月十六日から二〇一一年四月二日にかけて、六十三回にわたり「読売新聞」土曜朝刊に連載された小説である。翌二〇一二年三月に中央公論新社から初版単行本が出版された。初版単行本は六十六章から成り、初出と比較すると分量が大幅に増加している<sup>(1)</sup>。言うまでもなく、新聞連載中は連載回数や文字数の制限がある。単行本化にあたり加えられた箇所には、水村が重視した点が色濃く反映されていると考えられる。このような理由から、本稿での本文及び章番号は単行本に準ずるものとする。

これまでの水村の作品には、夏目漱石『明暗』を書き継いだ『続明暗』<sup>(2)</sup>をはじめとし、アメリカで暮らす「美苗」が、英語に囲まれた生活ゆえに感じる日本語への思慕の念を私小説的に書いた、英語と日本語の混在する横書きの作品『私小説 from left to right』<sup>(3)</sup>、エミリー・ブロンテ『嵐が丘』を下敷きに、昭和三十年代から平成にかけての日本を舞台にした恋愛小説『本格小説』<sup>(4)</sup>がある。「〇〇小説」というタイトルの作品が続いており、作品のジャンルを強

く意識している作家だといえるだろう。『母の遺産 新聞小説』も、サブタイトルではあるが「新聞小説」という語が掲げられており、水村の方法意識が現われているといえよう。水村は本作について、次のように述べている。

かつての日本では新聞小説はとても影響力がありました。でも今は新聞も、小説も、影響力がない。ジャーナリズムそのものは民主主義に必要ですが、毎朝各家庭に配られる紙の新聞の歴史的使命はもう終わった。同時に、唯一手頃な値段の文化商品だった小説の歴史的使命も終わった。今一度、その過去の栄光を確認し、その終わりを記すため「白鳥の歌」のようなものにしようと思いました。<sup>(5)</sup>

ここで使われている「白鳥の歌」について、水村自身はその意図するところを明らかにしていない。「白鳥の歌」とは、死に瀕した白鳥が歌うという美しい歌のこと、転じて、ある人の最後につくった詩歌、歌曲などを指す語であるが、俗に「過ぎ去った昔の幸福などを詠嘆的に追憶する」という意味も持っている。「過去の栄光を確認し、その終わりを記すため」という書きぶりから、ここでは、かつては娯楽の一つとして親しまれた新聞小説について、その役割を終えつつあることを意識し、新聞小説が栄えていた時代を追憶するといった意味で捉えるべきところだと考えられる。このことは、

大衆向けといえども、当時新聞を買うのはまだある程度の知識層だったということか。(中略) 新聞小説がそんなに大層なものだった時代はすでに遠かった。(五十三)

という箇所にも反映されており、水村にとって本作は、「新聞小説」へのオマージュであると同時に、葬送の思いを込めた作品だといえる。

また、水村は本作の読者層について、

今度の問題は、「ふつうの日本人の女の人が読みたい小説」とでもいうべきかしら。『ボヴァリー夫人』という小説がどういう問題を設定しているかについて、もっとも的確な分析をしているのはボードレールなんですね。フランスの小都市に住み、焦燥感やら欲望やらをふつふつと抱えて生きている女の人が、一番自分を重ねやすい状況を描いたのだと。私の場合は日本の中年の女の人が自分を重ねやすい状況を描きたいと思っています。社会層など具体的な部分は違っていても、どこか核の部分で身乗り出して読めるような小説です。<sup>(6)</sup>

と述べている。また、水村は本作の主人公について次のように述べている。

時代に寄り添って共感を与えつつ、いかに時代を先導する魅力的なヒロイン像を描いて、多くの読者を感化するか。これはいまも変わらぬ「新聞小説」成功の鍵でしょう。<sup>(7)</sup>

水村は対象とする読者を「中年の女の人」に定め、その読者が共感するような内容を目指した。『ボヴァリー夫人』は新聞小説ではないが、世間の耳目を集めた作品として、水村が『母の遺産』の主人公の性格及び取り巻く状況といった設定のヒントを得た作品であることが確認できる。『ボヴァリー夫人』と本作との関係性は後に詳述するとして、作中の記述を整理していくと、本作で描かれるのは二〇〇九年の年末、母紀子が最後の骨折をした日から、連載最終日と同じ二〇一一年四月二日まで、つまり読者が生活している現在と同じ時期であることがわかる<sup>(8)</sup>。主人公・平山美津紀は五十代の女性で、右に挙げた資料の中で本作の大きなテーマとして掲げられているのは、「親の介護の問題」と「夫婦の今後」についてである。水村は本作の読者層を、新聞連載を読んでいる、作品と同時代を生活している人々

であると明示している。しかし本作を読むと明らかに、「親の介護の問題」と「夫婦の今後」という二つのテーマを掲げてはいるが、作品のテーマの比重は「親の介護の問題」、特に「母娘の確執」に大きく傾いている。ここからはタイトルである「母の遺産」に注目し、紀子・美津紀親子にとって「遺産」は何を意味し、どんな役割を担っているのかを考察する。

### 一、「遺産」の意味するもの

「遺産」という言葉からまずイメージされるのは、金銭や不動産といった物質的なものである。本作の中に老人ホームや葬儀の費用など、執拗なまでにお金の計算が細かく記されていることも、「遺産」といえば「金銭」を連想させる一因である。作品中盤、三十三章で母が死去し、美津紀はおよそ三五〇〇万円の遺産を手にする。

山城むつみ氏は書評の中で、「遺産」について次のように述べている。

人と人とが織りなす諸関係、この不可視なものの変貌が「母の遺産」という可視的な物質のニュアンスの変容においてとらえられている。本書が冒頭から遺産の計算に始まり、葬儀にかかる諸掛り明細、離婚によって受けとることになる慰謝料、年金などの試算、離婚後のマンション売上の算段、等々、生々しい金銭勘定を赤裸々に書き込んで「母の遺産」の物質性を可視化していたのは、作にとって不可欠なことだったようである。<sup>(9)</sup>

このように山城氏は、母の生前・死後で「遺産」のもつ意味が変化していることを指摘している。前半での「遺産」は母からの解放の印でしかなかった遺産が、夫からの自立を支える軍資金へとその意味を変えていった。遺産があることによって美津紀は離婚を選択でき、新たな生活を始めることができる。遺産によって美津紀の決断は支えら

れているといえよう。母死後、もう一つの問題である哲夫との関係を考えるため、作品の舞台は湖のホテルへと移される。ここからは母の死を境に前半と後半にわけ、美津紀の心理や取り巻く状況の変化を整理しながら「遺産」の意味を考察する。

遺産に関する描写で注目すべきは、次の箇所である。

自分で言ううちに、あたかも母の遺産が母の魂そのもののように思えてきた。(六十)

美津紀が「母の遺産」を「母の魂そのもののように」感じたのは、美津紀が、哲夫が離婚を躊躇しているのは母の遺産が入ってくることを期待しているのではないかという疑いを抱き、もし離婚が成立するまでに自分に何かがあれば、遺産が哲夫に渡ってしまうという事実を知ったときである。このとき美津紀は、もし自分の身に何かあれば資産をすべて寄付するという旨の遺言状を書いた。遺産の重要性を痛感し、母の老いと死に振り回されてきた美津紀が、武と嵐の中をドライブをしたことを機に、自分の老いと死を身近なものとして意識した箇所である。

老いと死に直面したときに感じた「母の魂」とは、老いに抗い美しさを求め続けた母の「生き方」と言い換えられる。作品前半の美津紀は、老いてもなお若かりしときを忘れられず、わがままを言っただけ娘たちを困らせる現在の母の性格が、自分に与える悪影響ばかりに気を取られている。この母の性格は、母の生い立ち、そして祖母の存在が大きな影響を与えているとも書かれており、美津紀の祖母は、『金色夜叉』の「お宮」に自身を重ね、恋に生きようとして人生を狂わせていった人物として描かれている。水村が小説、特に新聞小説について述べているのが以下である。

小説には二つの側面があると思います。一つは、『こんな人生を生きてみたい』という欲望を植えつける。もう一つは、小説に描かれた世界と実人生との落差から『こんなはずじゃなかった』と不満を植えつける。近代社会が進み貨幣経済が成熟すると、女性であっても、簡単にメディアに触れられるようになります。それによって幻想を追い求めるように駆り立てられ、足るということをしなくなってしまう。そういう意味では、まさに茶の間まで届けられる新聞小説こそ、女性にとって一番手が届きやすく、一番害毒を流したともいえるでしょう。<sup>(10)</sup>

このように、小説は「欲望」と「不満」を植えつけるものであり、新聞小説はその最たるものであったと述べている。本作と同様読売新聞に連載され、人気を博した『金色夜叉』、そして『金色夜叉』によって現状に不満を抱き、もっと華やかな人生を歩みたいという欲望を持つようになった祖母が想起される。本作は祖母が『金色夜叉』に傾倒したことに始まる、女の三代記が描かれているといえるだろう。祖母、母、美津紀の関係が端的に書かれているのが以下である。

そう。そもそも祖母が自分の身をどのように「お宮さん」と重ねなければ、母がこの世に生を受けることもなかった。祖母がああ新聞小説さえ読まなければ、息子の家庭教師と駆け落ちなどをすることもなかった。そうすれば、母だけでなく、母の娘たちもこの世に生を受けることはなかった。日本に新聞小説というものさえなければ、美津紀も存在せず、こんな山奥のホテルで、大して吞めもしないのにワインを注文し、愛されなかった、などと独りごちていることもなかった……。

思えば、美津紀自身が新聞小説の落とし子であった。(四十七)

祖母や母が、それぞれの憧れ、今ここにないものを追い続けたこと、その結果を美津紀はこのように振り返っている。前述の通り作品前半の美津紀は、現在の母の性格が自分に与える悪影響に捉われている。しかし後半に入ると、

『金色夜叉』が世の女性に与えた影響を考える中で、あの母の生来の性格というものは、どこまでが本人の責任なのかという点に思い至る。次に挙げるのは、最終章での美津紀の言葉である。

母のような形で老いに抵抗したくはなかったが、ほんとうは、やはり、母のように、老い一つも、名状しがたい夢は見続け、魂のあくがれ立つまま、天の星に手を伸ばし続けたかった。(六十六)

最終章では美津紀が、母の生き方を肯定的に捉えるように変化していることが読み取れる。母の死を境とする美津紀の心情の変化が、より表れている箇所が次の二箇所である。

教育を受けた女によくあることだが、美津紀は自分のことを不幸だと思う権利などはないと信じて生きていた。歴史を振り返っても、地球の現状を見ても、人類の悲惨は不条理を極め、この世はまさに「苦界」としかいいようのない不幸に溢れている。美津紀のような人間が自分のことを不幸と思うのは、罰当たりというものであった。(二)

私は幸せだ——その瞬間、そう思わねば罰が当たると美津紀は思った。どれほど長いあいだその言葉を自分に言えなかっただろう。私は幸せだ、と美津紀は口に出して言い、誰にともなく許しを請うていた。(六十六)

前半と後半を比較すると、「不幸だと思うのは罰当たりだ」という思いから、「幸せだと思わねば罰当たりだ」と考えへとニュアンスが変化していることがわかる。加えて「歴史を振り返つ」たり「地球の現状を見」たり周囲と比較して「不幸ではない」と考えていた——あるいは考えるようにしていた——美津紀は、後半では誰と比較することもなく、自分の置かれている現状を見て「私は幸せだ」と言っている。

以上述べてきたように、本作でいう「遺産」には、金銭や土地といった物質的な意味のみならず、祖母から母そしてその娘たちに受け継がれた、今ここにないものを追いつける「生き方」といった意味も含まれている。そしてその生き方を美津紀自身が肯定できるようになったとき、美津紀は自分の人生、第二の人生を歩んでいくという展開になっているのである。

## 二、翻訳家としての再出発

次に焦点をあてるのは、美津紀が最後に「翻訳家」として再出発することを決意する点である。水村は「小説は『欲望』と『不満』を植えつけるもの」として捉え、それが祖母にとつての『金色夜叉』であり、母にとつての「中原淳一の挿絵」や「銀幕のスター」であり、美津紀にとつての『ボヴァリー夫人』だった。本章では、母からも夫からも解放された美津紀が「翻訳家」をを目指すことは何を意味するのか考察する。

まだ母の見舞いに病院へ日参していたとき、「ちよつといい話」として、『ボヴァリー夫人』の翻訳をしないかという話が美津紀のもとに舞い込む。哲夫の同意が得られなかったこともあり、そのときは断念したこの仕事を、新たな生活を始めようとするにあたりもう一度挑戦しようと思ひ立つ。湖のホテルにも持って行った愛読書『ボヴァリー夫人』の翻訳への思いを、美津紀は次のように述べる。

十数年前、『ボヴァリー夫人』の翻訳を、例の秀でた額の教授に依頼してきた出版社であった。あれから新訳が出ていないのは、何かのことで企画が頓挫してしまったのか。（中略）美津紀は引越が終わり、落ち着いたところで、自分がその出版社を訪ねる姿を想像した。自分を売りこむのには慣れていないので妙な感じがしたが、想像できない姿ではなかった。（中略）



最初の数行を翻訳してみても、それなりに自分で満足のゆくものができたら、あの出版社に見せにいくのはどうだろう。（中略）  
今さら偉大なことはできなくとも、何かはできる。あの本の翻訳なら少なくとも試みられるような気がする。（六十六）

美津紀はパリでフランス語を学び、大学の非常勤講師として英語を教え、アルバイトで翻訳の仕事をしている。言語に関して豊富な知識を持っていることはもちろん、湖のホテルでは、石碑に刻まれた漢詩や「ガーデンコンダクタ」という役職名に注目するなど、言葉に対して鋭い感性を持った人物として描かれている。

美津紀は用心深くもう一歩進み、母は自分でものを食べられなくなったら、「ケイビ」はもちろんのこと「イロウ」も厭がっていたので、家族もそれを尊重したいとつけ加えた。「ケイビ」とは「経鼻」という文字通り、鼻孔に管を入れて栄養を入れることである。「イロウ」は「胃瘻」と書き、胃に穴を開けて栄養を入れることである。

老親の面倒を見るとは、それまで聞いたことがないような言葉——それも、できれば、一生聞かずに過ごせたほうが幸せな言葉を学ぶことであった。

それはなんと悲しい経験だっただろう。（二十七）

人生は「胃瘻」や「経鼻」だけでなく、「合意分割」「年金分割」「退職金の財産分与」などという言葉も人に学ぶのを強いていくものなのか。（三十七）

「胃瘻」「経鼻」など母の入院に関連して知った医療用語や、離婚するにあたって理解を求められる言葉が並べられ、これらの言葉に美津紀は現実を鼻先に突き付けられるような思いをする。直面している問題を、それに伴って知った言葉から感じ取っている姿が窺える。日々現実に来た出来事を伝える新聞も、現実を感じさせる言葉が溢れて

いる。現実的な言葉で構成されている新聞の中に小説が掲載されているのと同様に、美津紀は、こうした残酷な言葉に打ちのめされる一方で、美津紀は言葉の持つ美しい響きにも目を向けている。シャンソンの先生に入れ込む母に、フランス語の歌詞を教えてほしいとせがまれたとき、美津紀は次のように述べる。

「日本語訳のほうがいいことが多いのよ」

事実「さくらんぼ」とフランス語の「cerise」——英語でいう「cherry」を比べたら、いかに「さくらんぼ」という言葉のほうか、ふっくりとした若い女の身体を彷彿させ、愛らしいことか。(二十二)

日本語で表現することによって感じられるニュアンスとその魅力に、美津紀は惹かれていることがわかる。作中、翻訳について触れている箇所がもう一か所ある。

小さいころは小説を通じて新しい言葉を自然に覚えていった。戦後の貧しさを残した千歳船橋の家で読む西洋の少女小説に出てくる言葉の魔力——「モミの木」「風車」「暖炉」「四頭馬車」「妖精」。挿絵も美しかったが、耳慣れぬ翻訳語には、この世にあつてこの世にない霧深き世界への道案内のような、えも言われぬ魅力があつた。思春期に入つて読む小説は早く大人の女の人になる日を夢見させてくれる言葉ばかりであつた。「脂粉の匂い」「絹の靴下」「黒いレエスの手袋」「ヴェルヴェットのマント」「紅」「黒繻子の帯」。(二十七)

美津紀が幼少期に読んでいた少女小説に出てくる翻訳語について、述べている箇所である。これに通ずる水村の発言が以下である。

「ぶどう畑」「石切り場」「聖ヨハネ祭」——これらは原文では田舎くさい生活を喚起する言葉です。それが日本語に翻訳されたたん、具体的なイメージにはつながらないまま、田舎くさいどころか何やらひどく洒落た響きをもってしまふ。のみならず、一風変わった日本語は、それが具体的なイメージにつながらなければつながらないほど、遠いもの、未知なるもの、ここにはないものへのあこがれを、私たちの心に掻きたてるのです。<sup>(4)</sup>

美津紀にとって西洋の小説を翻訳するということは、現実世界で出会う言葉とは異なる、憧れを抱かせる魅力を持った言葉を生み出すことであり、今ここにはないものへの憧れを再び自分の中に甦らせようとする行為といえるだろう。

### 三、エンマと紀子

先述の通り、水村は本作を執筆するにあたり、「自分を重ねやすい状況を描いた」作品としてフローベール『ボヴァリー夫人』を挙げている。また前章で考察した通り、美津紀が「あの本の翻訳なら」（六十六）と翻訳の対象に選んだのが『ボヴァリー夫人』であった。本章では『母の遺産』における『ボヴァリー夫人』の位置づけを、母紀子とエンマの共通項を挙げて考察する。なお、『ボヴァリー夫人』の本文引用は『フローベール全集1』（伊吹武彦ほか訳、筑摩書房、一九六五年十二月）からとする。

『ボヴァリー夫人』は、一八五六年に雑誌『バリ評論』に発表された十九世紀フランス文学を代表する長編小説である。『母の遺産』の中で『ボヴァリー夫人』は、以下のように紹介されている。

恋愛小説を読み過ぎた十九世紀のフランスの田舎女の話であった。感傷的で夢見がちの少女エンマは、小金のある農家の娘で、修道院で身にすぎる教育を受けるうちに、こっそりと「恋、恋人、恋女」の小説をむさばり読み、人生に華やかなものを期待しすぎるようになる。(中略) この小説は自分のことが書いてあるのでは、と怪しんだ女がフランス中にいたという。以来、小説を読みすぎ、人生に華やかなものを期待しすぎることを人は「ボヴァリズム」と呼ぶようになった。(四十六)

エンマはベルナル・ド・サン・ピエール『ボールとヴィルジニー』(一七八八年)などの恋愛小説を読み耽り、小説によって知った華やかな世界を夢想している。シャルルとの出会いによって、自分が欲していた幸福を我がものにしたと思ったものの、田舎での新婚生活がエンマの期待を裏切る。シャルルと結婚して間もなく、エンマは夫や周囲の環境の凡庸さに失望する。しかし以下の箇所明らかに、エンマはそんな自分の状況を「偶然」だと考え、「かなたには、幸福と情熱の茫漠たる国土」が広がっていると信じている。

物が手近かにあればあるほど、エンマの考えはその物からそれて行つた。彼女をじかに取り巻いているもの、退屈な田舎や、愚劣な小市民や、生活の凡庸さは、この世の中では一つの例外、特に自分だけがとらわれている一つの偶然だと思われた。しかしかなたには、幸福と情熱の茫漠たる国土が眼路もはるかにひろがっている。(第一部九章)

次に挙げるのは、最初の不倫相手ロドルフと出会った場面である。

そのときエンマは、かつて読んだ書物の女主人公たちを思い出した。これら不義の女の合唱隊はどれも姉妹のように似かよつた声でエンマの記憶の中に歌いはじめた。その声はエンマを恍惚とさせた。エンマ自身もこうしたまぼろしのまぎれもない一部となった。かつてあればと羨望した典型的な恋の女、その恋の女に自分自身を見立てることによって、エンマは青春時代の見果てぬ夢を今ここに実現したのである。(第二部九章)

「恋の女に自分自身を見立てること」によつて「見果てぬ夢を今ここに実現」しようとしたエンマの姿が描かれる。この箇所こそ「人生に華やかなものを期待しすぎること」、「ボヴァリズム」が表れている箇所だといえる。

小説世界に心を奪われていたとはいえ、修道院で神の教えを学んでいた時期もあるエンマが、不倫を繰り返してまで自分の求める理想を追い続けるようになったのは何故か。松澤和宏氏は次のように述べている。

シャトーブリアンは『キリスト教精髓』（＝エンマの愛読書の一つ―引用者注）のなかで、良き習俗を涵養するものがキリスト教であるという考えを述べ、キリスト教の影響下にある文学や美術は感動を通して徳の実践に繋がると評していた。ところが、エマの読書が「自分の利益となるものだけ引き出」して、道徳や宗教の観念を「すべて不要として捨て去った」結果、彼女の関心はすでに宗教や道徳からは遠く離れてしまったのである。（中略）良妻賢母を育てようとしていた当時の修道院での教育は、エマの場合には挫折に終わったのである。それに加えて、エマを躰ける役割を果たすはずであった母親の死によつて、夢想がエマの身の上と呼び寄せる身の程知らずのさまざまな欲望や野心に対する抑制力を涵養する機会を彼女は失つてしまったとも言えるだろう。<sup>12)</sup>

このように、エンマの欲望・野心の強さは偏った読書から生まれ、その欲望が増長したのは母の不在が影響していることを指摘している。この母の不在がもたらす影響は、美津紀の祖母と母の関係にも通じる。美津紀の祖母は美津紀の幼少期まで生きていたので、実際には不在だったわけではないが、祖母はかつて芸者上りである自分の生い立ちに対する負い目から母のわがままを黙認しており、母もまた成長するにつれて理解するようになった祖母と自身の生い立ちの哀れさを主張し、家では我が物顔に振る舞うことを当然としていた。母親が抑止力として機能していないという点で共通しているといえるだろう。また現状への不満が爆発する要因として、自分より上の階級の暮らしを垣間見る機会があったことも見逃せない。エンマにとってはヴォービエサールの館での舞踏会で、母にとっては「横浜の

家」がそれにあたる。

次に挙げるのは、二人目の不倫相手レオンに宛てて、恋文を書くエンマの様子を描いた場面である。

エンマはそのくせ、女というものはかならず恋人に手紙を出さねばならぬという考えから、依然として恋文を書きつづけていた。

けれども書いているうちに、ほかの男の姿が見えてきた。それは、焼けつくような記憶と、こよなく美しい読書の思い出と、きわめて強い欲望からつくり出されたまぼろしであった。(中略) エンマはその男を身近に感じた。彼は今にもやってきて、口づけのなかに彼女のすべてを奪い去ろうとする。やがてエンマは疲れ切ってバツタリたおれた。当てもない恋の興奮は、はげしい肉のたわむれ以上に彼女を疲労させたのである。(第三部第六章)

レオンを想いながら手紙を書いているはずのエンマは、「ほかの男の姿」を身近に感じ恋焦がれる。この「ほかの男の姿」とは「強い欲望からつくり出されたまぼろし」、つまりエンマが理想とする恋の相手である。小説から得たイメージによって作り上げた理想を追っているエンマは、いかなる相手も理想と完全に一致することはないことを自覚している。ロドルフとの不倫もレオンとの不倫も、エンマを一時的に満足させているように見えるが、この箇所によつて二人の男は幻の代替物として機能しているに過ぎないことが明らかになる。

『母の遺産』で、母の不倫相手として登場するのはシャンソンの先生である。父が入院中であるにも関わらず、今の状況が落ち着いたらヨーロッパ旅行をしようと美津紀に提案する。父を放置している上に無神経な提案をする母に対して美津紀は憤りを覚え、シャンソンの先生と行けばいいと突き放す。しかし母は「イマイチ外国に行ったような感じがしない」「いかにも日本人のフランス語」などと不倫相手との旅行に消極的である。そんな母を、美津紀は次

のように分析する。

前々から妙な組み合わせだと思っただけで、あの男は母が真に求める相手ではなく、自分の空回りする欲望を埋めるための「間に合わせ」でしかなかった。（中略）母はあの男が「間に合わせ」でしかないのを承知しつつ、自分に残された年月を少しでも華のあるものにしようと、「間に合わせ」を相手に一人で派手に人生という舞台で踊っていたのであった。（二十三）

母が不倫相手とのヨーロッパ旅行に消極的であるのは、エンマと同様に母も、どんな相手も自分が作り上げた理想を投影した色褪せたコピー、「間に合わせ」でしかないことを自覚しているからであらう。

このように『ボヴァリー夫人』のエンマと『母の遺産』の母には、その生き方に共通するところがあることが確認できる。前章で考察したように、美津紀にとって翻訳語は憧れを抱かせる魅力を持った言葉であり、翻訳とは今ここにないものへの憧れを再び自分の中に甦らせようとする行為である。自分の理想を追い続ける母の生き方は、娘である美津紀らに負担をかけ、美津紀が自分自身の問題、夫との問題を直視できない原因にもなった。本作前半で母の姿を語る存在であった美津紀が、母からも夫からも解放され翻訳家になり、『ボヴァリー夫人』の翻訳への挑戦を決意する。「遺産」についての考察でも述べたように、美津紀は最後まで母の生き方を全面的に肯定することはしない。母のシャンソンの先生との恋愛について、美津紀は次のように冷ややかな評価を下している。

老いた母、しかも金持ちでもない母と恋愛しようなどというのは、イマイチの男しかいなくて当然だったということか。そんな男と恋愛するぐらいなら、母はなぜもとと毅然として、たんに心のなかで見果てぬ夢を追っていられなかったのか。あの男は、病いと老いという、人生の負の部分を抱えこんだ父から逃れる手段だったということか。（二十三）

数多ある外国文学の中から、美津紀は母の人生と似通った点を持つ『ボヴァリー夫人』を翻訳することで、母の人生を肯定的に捉え受け入れようとしたのだと考えられる。

エンマと共通点を持つのは、母だけではない。美津紀にもボヴァリズムが感じられる箇所がある。次の箇所は、美津紀が哲夫にプロポーズされたときのことを思い出し、当時の自分の決断にやや後悔を感じている箇所である。

あのパリの屋根裏で蠟燭がちろちろ揺れるなかで沈痛な表情をしていた哲夫。あの哲夫に美津紀はいかに大きなものを脳天気に投影してしまったことか。『ラ・ボエーム』のロドルフォだけではない。『赤と黒』のジュリアン・ソレルも『嵐が丘』のヒースクリフも。多分に『金色夜叉』の貫一も。文無しだが、天の星に手を伸ばし、俗を離れた野心をもち、かつ一人の女を熱烈に愛する男たち。少女時代からソファやベッドに寝転び、仰向けになったりくの字になったりして、おせんべいを齧りながらくり返し読んだ小説に登場した男たち。いかに彼らの姿を哲夫に脳天気に投影し、一人で舞い上がってしまったことか。

(四十五)

美津紀もまた、小説から得たイメージを自分の理想とし、小説の登場したような男を「哲夫に脳天気に投影し、一人で舞い上がってしまった」のである。さらに、先ほど祖母と母の関係でも述べたのと同様に、美津紀もまた母親が不在の状態であった。母は「横浜の家」にいつも憧れていた。美津紀の姉奈津紀が生まれてからは、自分が生きたくても生きられなかった人生を娘に託すため、ピアノのレッスンのために「横浜の家」に入りさせるようになる。母が姉のピアノのレッスン、そこで出会ったチェリストとの結婚、それに伴う家のリフォームなどに熱心に取り組んだ結果、美津紀のことは後回しになった。この姉妹の不平等が母娘の確執を大きくし母親からの監視がなかったという点で、エンマと同じ状況、母が不在であったといえるのではないだろうか。



このように、エンマと母と美津紀には其の人物造型について通底するものがあると思われる。美津紀は『ボヴァリー夫人』の翻訳を通して母の生き方を肯定すると同時に、自らの人生をも肯定し、翻訳家として新たな生活の始まりに希望を持たせたのではないかと考えられる。

## おわりに

『母の遺産』において、「遺産」は複数の意味をもつ。「遺産」は物質的な意味だけではなく、祖母から母、母から美津紀へと受け継がれた、今ここにないものへの憧れを追い続ける「生き方」と捉えるべきものである。母の生き方に振り回された美津紀は、母から聞かされた母自身の生い立ちや祖母のことを考え、祖母が人生を狂わせるきつかけとなった新聞小説『金色夜叉』の存在に思い至る。美津紀が生きている時代から百年以上も前に連載されていた『金色夜叉』が、祖母に植えた欲望、今ここにあるものとは違う人生への渴望が娘、そのまた娘へと受け継がれ、現代を生きる美津紀の人生に影を落としている。本作は『金色夜叉』と祖母、母、美津紀の女三代記を材料として書かれた、新聞小説にまつわる新聞小説だといえるだろう。

本作の登場人物たちは中から上流階級の人たちで、高級老人ホームや年金分与の話などの設定や金銭感覚のずれ、美津紀は実際には食事や入浴といった介護をしていない点など、現実味を欠いたと言わざるを得ない設定もある。果たして本作は水村が意図した通り、「どこか核の部分で身を乗り出して読めるような小説」になっているだろうか。美津紀の友人・昌子が、

「それって、女の人の夢物語だね。美津紀はシンデレラだよ。我々世代の」（中略）「五十代で、母親だけじゃなくなって、夫

までいなくなつて、金貨ザクザク大金持ちなんだから。ほかの女が聞いたら怒るよ」(六十六)

というように、美津紀のような状況は、「夢物語」の域を出ないのかもしれない。しかしヒロイン美津紀は水村が想定した読者層と同世代だと考えられる五十代の女性で、テーマも年齢的に直面するであろう問題が設定されている。その美津紀が「胃瘻」や「経鼻」といった言葉に現実を突きつけられても、翻訳語を通して懂れの気持ちを失わず、自分の人生を歩みだそうとする結末部分は、読者に希望を与えるものとなりうる。絶えず理想と現実に引き裂かれながらも今ここに生活している読者に寄り添う美津紀の姿勢こそ、水村のいう「核の部分」であり、そこに共感を覚えるからこそ読者にとつて、美津紀は「魅力的なヒロイン」といえる。

水村自身バイリンガルの作家であることや、これまでの作品が一部外国語に翻訳され出版されていることもあつてか、水村は「翻訳」というものに常に意識を向けている<sup>(13)</sup>。例えば『私小説 from left to right』(以下『私小説』)は、英語と日本語が混在する文章であるがゆえに、英訳不可能な作品であるといえる。英訳しようとすると日本語との境界が失われ、「美苗」の二重言語生活が正確に訳出できないことになるからである。また、日本語の箇所であっても、旧字体を用いたフレーズの古めかしさや、故意に平仮名を使うことによって表現される学生の気だるい口調、カタカナで表記された拙い発音の英語など、そのニュアンスを正確に翻訳することは難しい。『私小説』はこのような観点で読み解くと、翻訳がその大きなテーマになっているともいえるだろう<sup>(14)</sup>。さらに水村は、二〇一三年十月九日、同志社女子大学表象文化学部が主催した公開講演会で、「『本格小説』と『嵐が丘』——日本近代文学と翻訳」と題して講演を行った。この講演の中で水村は、将来的に書きたい作品として「翻訳可能小説」を挙げ、国や文化によって翻訳された内容に差が出ないような作品に挑戦してみたいと述べた。『嵐が丘』の翻訳に関して鴻巣果季子氏と対談を

したこともある<sup>(15)</sup>。対談の中で水村は、『嵐が丘』の第九章と第十五章を実際に翻訳し、鴻巣氏訳との比較を通して、キリスト教関係の言葉を日本語に訳す難しさや、反対に日本語の敬語表現を英訳することの困難さについて語っている。

『私小説』と『本格小説』は、奈苗・美苗姉妹やアメリカへの移住など重なる部分も多く、対になる作品と捉えられる。『母の遺産』は先の二作品とは異なる、独立した作品にも見えるが、『私小説』は先ほど述べたような理由で、また『本格小説』も『嵐が丘』を換骨奪胎した作品であるという点で、他言語と日本語の問題が絡む作品であることが指摘できる。バイリンガルでありながら日本語で書くことを選択した水村にとって、「翻訳」は見逃すことのできないテーマであり、水村作品全体を貫く問題として存在しているのである。

注①

加筆された主な内容は、母に関する事柄である。例えば、シャンソンの先生との逢瀬に夢中になっている母に対する美津紀の心情などは、第二十二章「桂家の崩壊」において大幅に加筆されている。本稿第二章で引用している「さくらんぼ」についての箇所も加筆された箇所のひとつである。

(2) 「季刊思潮」第一号（一九八八年）から休刊の第八号（一九九〇年）まで連載の後、未完の稿に加筆して、一九九〇年に筑摩書房より刊行された。

(3) 「批評空間」第七号（一九九二年十月）から第十二号（一九九四年一月）、および、「批評空間」第二期第一号（一九九四年四月）から第三号（一九九四年十月）に連載された。

(4) 「新潮」二〇〇一年一月号から九月号、および、二〇〇二年一月号に連載された。

(5) 水村美苗「ひと 水村美苗」『すばる』三十四巻六号 二〇〇二年六月

(6) 水村美苗、前田壘「世界史における日本語という使命」『ユリイカ』五六二号 二〇〇九年二月

(7) 尾崎真理子、水村美苗「母の遺産と日本の遺産」『Voice』四一四号 二〇一二年六月

(8) 作中、描かれている時期が明確にわかるのは、以下の三箇所である。

あれは、去年の十二月二十八日の午後二時ごろであった。(二)

実は母は十一月二十三日に誤嚥性肺炎で他界しました。(六十二)

引つ越したのは三月十日——日本が大きな不幸の波に呑みこまれる前日であった。(六十六)

第六十六章の記述から、「日本が大きな不幸の波に呑みこまれる」日とは東日本大震災を指していることがわかり、本作で描かれているのは、二〇〇九年十二月二十八日から二〇一一年四月二日であることがわかる。

また、『金色夜叉』の連載時期や中原淳一が少女雑誌の表紙絵を担当していた時期を考慮すると、祖母は一八七〇年代生まれ、母は一九二〇年代生まれ、奈津紀・美津紀は一九五〇年代生まれということがわかる。

(9) 山城むつみ「『金色』の変容、「夜叉」の変貌」(『新潮』一〇九巻七号 二〇一二年七月)

(10) 水村美苗「ひと 水村美苗」(『すばる』三十四巻六号 二〇一二年六月)

(11) 水村美苗「『愛の妖精』と「翻訳もの」の愉しみ」(『朝日新聞』一九九七年一月二十六日)(辻邦生、水村美苗『手紙、葉を添えて』筑摩書房 二〇〇九年十二月所収)

(12) 松澤和宏『『ボヴァリー夫人』を読む 恋愛・金銭・デモクラシー』岩波書店 二〇〇四年十月 五十三～五十四頁

(13) 本作には

「日本人なのだから、世阿弥の言葉に従い、序破急の「急」に達したというべきか。」(二)

「聖書など開いたこともない多くの日本人がいつしか十字架を掲げたチャペルで永遠の愛を誓うようになり、」(四十六)

など「日本が」「日本人が」という表現が散見される。この点に関して、執筆者が水村に、作家である水村が前景化しすぎているのではないかと指摘した。これに対し、水村は二〇一五年八月十六日、執筆者宛の手紙の中で「アルゼンチンの出版社がすでに『母の遺産—新聞小説』をスペイン語化することに決めていましたし、英語化される可能性もありましたので、どうしても外側の視点というものが忍び込んでしまったというのがあります。」と述べている。

(14) 山本幸正氏は「翻訳への挑戦としての文学作品」(『アジア・文化・歴史』第二号 二〇一六年六月)で、中国語版『私小説』がどれほど元の作品のニュアンスを伝えられているかについて述べた。この論文の中で山本氏は『私小説』について、「英語及び英語が提示する現実や真実に抗い、英語の外にある現実や真実に迫ろうとする『私小説』は、結果的に日

本語表記が有する多様性への（再）発見へと向かい、手垢にまみれているかのように見えた現代日本語の内部に、創造の息吹を感じさせることに成功しました。」と評価している。

(15) 水村美苗、鴻巣友季子「対談 日本語と英語のあいだで」（「すばる」第三十七巻五号 二〇一五年五月）

（やまだ さやこ・関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程）